

私は、何のために開拓花嫁として、勇躍満州に行き、何のために人生の一番花の時期を死ぬような苦難に遭い、何のために引揚げ後の苦しい環境を泣く思いで過ごし、そして何のために結核という世間から嫌われる病気となり、闘病生活を余儀なくさせられたのか。

これも、戦争・敗戦・避難行・引揚げという大きな時代の流れの中にいた一人のか弱い女の定めであり、生き方だったのか。

国と国の争いは、ただそれだけにとどまらず、掛け替えのないその人の生き方も変えてしまう恐ろしいものなのだ。平和になった今、こんな思いをしみじみと感じている。

中国残留姉妹の惨酷記

福島県 三瓶キノ

一 渡満までの我が家

私は、福島県の旧安積郡大槻町で大正十四（一九二五）年に、立花開助の三女として生まれましたが、兄三人、姉二人、そして弟が三人に妹が一人という大人数の兄弟姉妹で、その中でいろいろと採られながら育ちました。当時は、昭和大恐慌の真っ直中で農村はどこでも貧しい生活をしていましたが、「貧乏人の子だくさん」である我が家でも同じことで、貧乏農家では、毎日の食べることだけでも大変な苦勞をしていて、みんなひもじい思いをしていました。

そんな生活の毎日でも、私はあまりつらいとも悲しいとも思わずに育っていたのは、生来の剛直な性格のうえに、体は小さかったが丈夫であったので、家族のみんなから割合にかわいがられていたゆえかもしれません。住まいも衣食もひどい生活なのにと思うが、隣近所どこの家もみんな同じなのだから、これが普通で仕方がないことと思っていました。しかし我が家では、柿・梨などの果物が豊富で近所にはあまり無かったので、それだけでも私たちは、少しは幸福なのだと考えていました。貧乏な農家同士は、みんな仲が良

くて平和な部落でした。

だが、少しでも家の暮らしを助けるために、兄や姉は他家に行つて働かされていましたが、病氣になつて戻つたりしていました。

社会的にもこのままずっと不景氣が続くののだろうか、戦争はどうなるのだろうか、私も大きくなつたらどうなるのだろうかなどと考えると、不安な気持ちにもなつていました。

昭和十四（一九三九）年に、次兄が支那事変に応募して中支那に出征してしまい、次いで出稼ぎに行つていた長兄が帰つてきて、お嫁さんをもらつてすぐに新妻を残して満州に満蒙開拓団の一員として渡満してしまいました。大槻町からは最初の開拓団員だったので、「お国のために満州開拓に行く」ということで、出征兵士と同じように神社で武運長久の祈願祭があつて、町内総出の盛大な歓送を受けて出発しました。残つた家族は二人の兄の無事を祈りながら、心と力を合せて農作業に精を出していました。

長兄は、両親や兄弟たちに心配をかけまいと、北滿

の様子や開拓団の事情などを詳しく書いた手紙を度々送つてきましたので、私たちもみんな、家のことや部落の様子などを書いて出しお互いに励まし合つていました。また、次兄にも同じように手紙を出し、慰問袋も送つていました。支那事変もだんだんと激しくなり、義姉の兄さんが出征するなど身近な人が次から次と戦地に行きましたが、翌年になると、三番目の兄も結婚して間もなく召集令状がきて、朝鮮の部隊に入隊してしまいました。

長兄からの手紙で、北滿の珍しい話や開拓団での平和な農村生活などが評判となり、部落の人たちも満蒙開拓に関心を持つようになってきました。そんなときに、長兄の入植した筆架山開拓団の市川団長が、団員募集のために帰国し、私の家にも立ち寄つて、長兄のことを大層褒めて、「立花君には、今、畑作班長をやつてもらっているが、よく働いている」と言われて、父がとても喜んでいたことを思い出します。

昭和十五年の五月に長兄の長女が生まれ、その年の

九月には、長兄が家族を迎えに一年振りに帰ってきましたので、部落では歓迎していろいろと話を聞いていました。十月には長兄一家に加えて次姉と次弟が一緒に満州に行きましたので、出発した後は急に家の中が寂しくなり、満州からの便りを心待ちする生活となりました。

部落では、長兄の満州の話聞いて、後から後から開拓団に行く人が続きました。そんな状況の中で昭和十六年十二月八日を迎え、大東亜戦争が始まりました。

昭和十七年の春、義姉の実家の佐藤勘右衛門一家十二人が、一家を挙げて開拓団に入り渡満して町中を驚かせましたが、特に、一躍六十ヘクタールの大地主になったことが大評判となりました。

そんな話を聞いているうちに、だんだんと父の考えも変わってきて満州への興味を次第に持ち始めました。そんなところに次兄が除隊となって、戦地から無事に帰ってきました。

父は、家族全員で満州に渡ることを提案しました

が、戦地から帰ってきたばかりの次兄は体調もあまりよくなかったため、外地には行きたくないと言って反対していました。父は、「だんだんと米軍機による空襲も激しくなり、福島にいても安全でない。満州の方がよっぽど安心だぞ!」と言って、次兄と一緒に行くことを勧めていました。

二 一家の大移動

そのころ、筆架山開拓団にいた長兄には二番目の子供が生まれて二人の子持ちになり、一家は元気に生活をしていましたが、一緒に渡満した次姉が、子供三人もいる玉木家に後妻に入ることから、開拓団内にいろいろな問題が起こって、一家は筆架山を出て佳木斯市に移ってしまいました。父は、がっかりしてしまい、母は心配のあまり病気になって寝ついてしまいました。次兄も様子が分からないので度々手紙を出していました。

しかし、そのうちにだんだんと気持ちも落ち着いてきて、父は、「お国のために満州に行くのだ!」と言っていました。母も体調が回復してきて、孫の顔

が見たいから早く行きたいと言いました。

我が家の空気がそんな状態になっていたときに、郡山市では、満州に満蒙開拓団の郡山分郷を作る計画が進み、広く一般市民からも開拓団に参加する人々を募集していました。その先遣隊が昭和十八年三月に、満州国三江省依蘭県西阿に入植して、郡山分郷を開きました。そこは、松花江岸の依蘭街に近く、開拓団の密集地帯で、立地条件もそろって良好な所だったので、第二の郡山を大陸に建設するという大義名分で、更に団員を大々的に募集し始めました。

ただ、郡山分郷の団員は一般市民から応募した者が主力であったので、農業労働に対する経験がなく働く意欲が低かったので、農業の指導者を得ることが緊急の課題とされていました。そのため分郷の茅原団長が出張してきて、父のことを聞きつけ、是非とも農業指導員として郡山分郷に来てもらいたいと要請されました。

父は大槻町でも有数の篤農家といわれていたので、茅原団長と意気投合して、満州への話がまとまってし

まいました。

三 敗戦までの生活

一行は三十人近い大所帯となりましたが、みんなは前途にある未知の世界に対する興味と、新天地を創造するという希望に胸が膨らみ、心強くにぎやかな旅路となっていました。

私は父母たちとは別行動となり、「満州花嫁養成所」の福島班八人の一人として、父母たちの一行と相前後して日本海を渡りました。二番目の弟も高等小学校を卒業する前に「満蒙開拓義勇隊」に入っていましたので、家族全員が満州に移ったことになりました。

昭和十九年四月、私は三江省鶴立県蓮江口の第六次開拓団宮城村にあった「花嫁養成東宮女藝」に、全国から選ばれた二十四人と共に入所しました。そこで男女各一人の先生を中心にしての新しい生活が始まったのです。先輩は一人だけでした。駅に近くて、松花江の向こう岸は佳木斯市で長兄のいるところでしたので、少しも寂しいとは思いませんでした。近くには飛行場警備隊が駐屯していましたが、そこには親類筋に

あたる前林広さんがいて、時々訪ねてくれました。前林さんは私の長姉と同級生で、大槻町にいたときには慰問袋を送ったこともありました。

四月の声を聞いても、北滿はまだまだ寒くて毎日寒さに震えていましたが、そのうちに日に日に春めいて暖かくなり、訓練が開始されました。

ひばりがさえずる青空の下で、馬を使っての農耕作業をしたり、まだ凍っている畑や水田を耕して野菜や稲の種まきをしたり、協同倉庫に食糧を受け取りに行ったりなど、開拓農家の主婦に必要ないろいろなことを学び、希望に満ちた毎日を過ごしていました。

秋が深まってくるころに、訓練課程を全部終了して卒業することになり、十二月に二十四人全員がめでたく巣立ち、各方面に散って行きました。

私は家族のいる郡山分郷に行きました。一緒に巣立って、次兄のお嫁さんに決まった三浦孝代さんが一緒に居ました。冬景色一色になった北滿は、植物はみんな枯れてしまい、荒涼とした広大な原野は殺風景で寂しいだけでした。迎えにきたトラックは荷物を積んでい

たので、その荷物の上に座っていたのですが、道が悪く激しく横揺れをしていて、気を緩めることもできませんでした。途中で上乗りしていた人の数が足りないことに気付き、車を止めて捜しに戻ったら、立派な身なりをした満人の男が大声をあげて、「マーマ、マーマ（お母さん）」と泣いていました。大の男が泣きわめくのを初めて見た私は、びっくりしてしまいました。

再び車は動き出しましたが、今度は隣に座っていた孝代さんがうつぶせになっているので、どうしたのかと思ったら失神していたのです。それを見てみんなで大騒ぎをしましたし、私も随分と心配しましたが、幸いに命には別条なかつたので安心しました。そんなこんなの出発事を起こしながら郡山分郷に着き、父母たちの顔を見てはっと安心し、疲れがどっと出たことを記憶しています。

郡山分郷は二個部落で約三十戸、総勢約百人余でしたが、冬を迎えて越冬するための食糧や野菜が必ずしも十分でなく、不安の中で不自由な生活を送っており

先行きが案じられていました。父も農業指導員という立場から大変に苦勞をしていたようです。

開拓団とはいつても、農業の経験のない人が大部分を占めている、にわか開拓団であり、そのうえに福島とはまったく気候も農作業の方法も異なっているの、父でもあまりよく分からず、現地民から習いながらの仕事でした。能率は全然上がらず、そのうちには団員の団結心にもひびが入り、成績も良くなく見通しの暗い話ばかりでした。満拓公社の保護指導も足りず、日常生活に必要な物資の配給も不足しているうえに滞りがちで、団員の不平不満は募るばかりでした。

郡山分郷のそんな様子に私たちも心を痛めていましたが、女なので父や兄を信じて辛抱するしかありませんでした。

郡山分郷開拓団には、国民学校（小学校）が開設されてきました。その校長先生の奥さんが肺結核にかかって依蘭病院に入院することとなり、私に付き添いを是非頼みたいと強く言われました。両親は、私が感染することを心配してあまりよい返事をしていません

でしたが、奥さんから再三頼まれるので、致し方なく一緒に病院に行き、看病生活を数カ月しましたが、治療の効もなく亡くなられました。

団に帰ってみると、戦局が日に日に大変になっていたので、団からも応召者が次々とあつて頼りになる団員の数も随分と少なくなっていました。心細さが増して一体これからどうなるのかと話し合つてばかりいました。家族全員で希望に満ち満ちてここまできたのに、もうこんなことになってしまったと悲しい思いもしました。我が家で一番頼りにしていた次兄にも召集令状がきて、すぐに出征してしまいました。

親しくしていた満人が、兄の出征することを聞き付けてすぐに我が家に来て、「日本は負けるから兵隊には行くな！ 立花さんのところは我々で守るから心配しないでいい」と言ってくれましたが、その言葉に感謝しながら、次兄は勇躍出征して行きました。やはり日本人と中国人との思想の違いがあつたのでしよう。

今年こそはと団の総力を結集しての増産計画が突っ

て、田も畑も青々として生育しているのを見ながら、団の男の人たちは一人残らず兵隊に行ってしまった。

残った老人、女、子供でこの郡山分郷開拓団を守っていたかなければと、みんなで励まし合って農作業を続けていました。これからどうなるのだろうかという心配はありましたが、一応は平穩無事な毎日が続いていました。

四 避難行が始まる

昭和二十年八月八日、かねてから現地民の間でうす噂されていましたが、ソ連軍が「日ソ不可侵条約」を一方的に破棄して、ソ満国境の数カ所から怒とりの如き勢いで侵入してきました。ソ連軍の侵入の急報が団にも届き、すぐに避難命令が出しましたが、そのときにはもうソ連機による空襲が開始されています。我が家でも早速に身の回りの物と食糧を各人が背負って避難準備をしました。

郡山分郷は鉄道の駅から少し離れていたもので、松花江岸の依蘭街に出て松花江を船で下るしか方法がない

ので、依蘭街に向かって出発しましたが、当てにしていた船が爆撃によって沈んでしまい、一時は呆然としてしまいました。そこにもどうしようもないので、再び西阿に戻りました。

そこで日本が敗れたことを知らされ、みんなの驚きと失望は、それこそ大変でした。これからどうなるのか、日本に帰ることができるといふことだけが話題でした。

再び松花江の河岸まで行くことにしましたが、河岸に着いてもだれ一人歩いている人はいません。そのうちにだれかが、「向こう岸の山には匪賊がいるから、危ないから行かない方がよい！」と言っているの、途方にくれてしまいました。しばらくその場で休んでいると、満人の船がきてみんなを乗せて河を渡してくれました。ここから先は山にはい登るほか進む方法がなく、恐る恐る山を登り頂上にたどり着きましたが、幸いに匪賊に襲われることはありませんでした。

尾根伝いにしばらく歩いて行くとき大きな道に出ました。その道を歩き続けました。目的地はハルビンでし

だが、どっちに向かつていけばハルビンなのか、どの道がハルビンに通じているのか、どのくらい歩くのかなど分からないままに、ただひたすら歩き続けました。

満人に襲われることが度々あり、持っていたわずかなばかりの荷物も次々と奪われてしまい、悲惨な避難行となってしまうした。

部落の近くを通るときは、「子供を泣かすな！ 子供の口を押さえて早く歩いて部落を通り抜けろ！」と言われて、懸命に通り過ぎました。子供を連れて歩いてきた人たちは、子供によく言い含めるなどをして気苦労をしていました。

私たち若い女は銃を背負って年寄りの手を引き、母親は子供を背負い荷物を抱えるか、反対に荷物を背負って子供の手を引いて歩きました。ついこの間までは想像もしていなかった哀れな、そして惨めな姿となりました。夜通し歩いていましたが、体がだんだんと重くなり、背負っていた銃や五十発の弾の重さがずっしりとこたえてきて投げ出したくなりましたが、それ

もできずに歩きました。途中で止まったらそれこそここで行き倒れになってしまうので、歯を食いしばって歩きました。

こうして、雨が降っても天気になっても風が吹いても歩いていたので、老人や、体の弱い人や、小さな子供などは次々に倒れてしまいました。「その銃で私を撃ってください」と泣きつかれてしまうこともありましたが、どうしても歩けない人は、かわいそうでした。置き去りにするほかありませんでした。そして、ただただ歩き続けました。

満人部落の前を通るとき、部落の人に気づかれると鎌や棍棒を振って追いかけてきて、逃げ回る人をたたき殺して着ている物をはぎ取り、持っている荷物を奪ってゆくのです。そんなことを繰り返しながら歩いているときに、また銃声が聞こえたので、どうしたのかと思っていたら、七十歳を超した年寄りを、その子供が銃で撃つたとのことでした。歩くよりこうしてもらった方が楽だと言われて、泣く泣くのことだったそうです。

天気の良い日だけならばまだよいのですが、雨が降ったり風が吹いたりしたらそれこそ惨めでした。全身が濡れになってしまい、持っている荷物も重くなり、歩けません。雨よけをしようにも、野原では雨を遮る所もないのです。疲労は極限に達していますが、止まることもならず歩くだけです。夜道で、足に何かつまづく物があったので、何かしらとよく見ると、小さな子供が毛布に包まれて横たわっていました。母親は死んでしまったのか、それとも足手まといになって捨てられたのか、悲しいことばかりの連続でした。

大きな河にたどり着き、さてどうして渡ろうかと思案しているうちに、年寄りも、女、子供もお互いに手を引いて渡り出しました。私たちも、恥も外聞もなく着ている物を全部脱いで、荷物と一緒に頭に乗せて丸裸になって渡りました。河の水は胸の辺りまであって、手をつないで渡らないと流されてしまいそうでした。

河を渡ってしばらく歩いていると、比較的大きな街に入りましたが、そこは、後で聞くと方正街という所

だと分かりました。

そこにはソ連兵がたくさんいて、すぐに私たちの集団の方にきて、時計はないかと探しはじめましたが、私たちは途中で何回も襲われているので、めぼしい物は何一つとして持っておりません。ソ連兵は、さも悔しそうな態度をして銃を振り回していました。

大きな満人部落に案内されて、今夜はここに泊まるということになりました。久し振りにゆっくりと休めるといふことで、私たちはほっとして庭で休んでいましたら、ソ連兵がどやどやとやってきて、若い女の人を見付けては強引に連れ出していました。驚いて男の人の後ろに隠れても探し出していました。その夜は、寝付けずに一夜を明かしました。

翌日、収容所に入れるということで連れられて行く」と大きな門構えの部落があり、「方正伊漢通収容所」といふ看板が掛けられていました。いよいよ収容所生活の開始となりました。一つの開拓団は一軒の家に住むように割り当てられました。この収容所は、以前は「第九次沖繩開拓団」の伊漢通開拓団のあった所でした。

た。

豆や高粱の配給があり、拾ってきた大きな空き缶で炊事をして飢えをしのいでいました。毎日、ソ連軍の作業に使われ、松花江河岸の船着き場で穀物の積み下ろし作業に従事していましたが、帰るときには、空になったカマスやアワなどをもらったので、大いに助かったものでした。

九月に入ると朝晩はめっきり寒くなり、避難するときから着ていた夏物ではとても寒くて耐えられず、そのうえに今までの疲労の蓄積と栄養のとれない食べ物のために、年寄りや子供たちは毎日のように死んでいきました。郡山分郷開拓団でも、子供はほとんど死んでしまいました。私と義姉とは、その死体を墓場まで運ぶのが仕事となっていました。死体は、土を掘り起こして埋めることもできず次から次と置いていくだけで、山のように重なり合っていて、その有様は見るも無残な姿で哀れなものでした。

ソ連兵の「女狩り」は相変わらずで、夜になっては収容所に来て女に乱暴をはたらいていましたので、若

い娘はみんな頭を刈って坊主頭になり、服装も男物を着て男と同じ姿になっていましたが、それでもよく見ればすぐに女ということが分かりました。ある女の人は両親の目の前で乱暴され、両親が助けに入るとその場で両親を射殺して、その人を連れて行きました。後で聞くとその女の人も殺されたそうです。

そんな残虐な行爲が度重なって起きると、私たちもここにいることは最も危険だということになり、収容所を抜け出してハルビンに向かうことを考えました。

しかし、松花江より吹き上げる北風は、粉雪を巻き散らすような激しいものでした。着ている物考えないと、とてもではなく、一步収容所から出たらすぐに凍え死んでしまうようでしたので、歩いて脱出することは困難でした。

寒さはだんだんと厳しくなってくるし、食べる物も無くなってくると、若い女の人の中には、満人のところに助けを求めて行く人が出てくるようになります。この収容所に入ったころは何千人もいたのに、数えられるくらいの人数になってしまいました。お金の

ある人や丈夫な人は、次から次とハルビンに向かって出て行きました。

この冬に、父も母も、そして玉木家に嫁いだ次姉も、栄養失調と寒さが原因で病気になる、目の前で死んでしまいました。しかし、悲しみに打ちひしがれている暇などありませんでした。

ようやく春になって暖かくなってきたところに、八路軍との交渉によって、方正収容所にいる避難民はハルビンに向かって出発することになり、病人や小さい子供たちは八路軍の馬車で送ってくれるとのこと、私や妹は歩いて行くことになり、一足先に出発しました。妹は、病気がかりでしたが馬車には乗せてもらえず、致し方なく一緒に行くことになったのです。

見知らぬ人たちの仲間に入って、「日本に帰れる！」「もうひとふんばりだ！」という言葉だけを心のよりどころにして、ハルビンに向かって歩き始めました。

五 残留者の悲劇

十歳だった妹は、この間まで高熱を出して寝ていた体で、みんなと同じようには歩けずに遅れがちでし

た。私も妹を背負って歩く力はなかったので一緒に歩きましたが、そのうちに妹は足が曲がらなくなり棒のように硬直して、前に踏み出すことも困難になりました。しかし、一人残しておくこともならず、必死になって手を握り、お互いに励まし合って歩いていました。行列からは遅れてしまい、遅れては必死に力を振りしぼって追いつき、追いつくとまただんだんと遅れてしまう繰り返しで、最後には引きずって追いつくという難儀でした。日も落ちて暗くなったところに、馬車に乗って出発した人たちがいる場所に着きました。みんな心配して待っていてくれたのです。

その夜に、運命のいたずらが訪れたのです。

精も根も尽き果ててしまった私たち姉妹のところに満人が来て、私たちの面倒を見ると言うのです。最初はその話には耳も貸さなかったのですが、周りの女の人も、次々と満人の要求を受け入れて連れて行かれるのを見て、私も、このままではもうすぐに死んでしまう、死んでしまつては今日までの苦勞が何もならない。何としても生きなければならぬと決心して、満

人の言うことを聞くこととしました。妹は別の満人が引き取るということで、妹も不承不承承知したので、連れて行かれることになりました。

後々になっても後悔の種となりましたが、そのときには、そうするほかに手段は無かったです。とうとう一緒に満州に渡ってきた家族もばらばらになつてしまいました。

私を世話すると言つて連れにきた人は、当然、私を妻にする気であり、当時の周囲の状況からしてもそれが当然のことであることは、私も理解していましたが、いざ、その場になってみると、私は激しく抵抗をしました。私は比較的の小柄の方でしたので、抵抗をしても惨めな有様でした。

夢中になつて外に飛び出して、大声でわめき散らして泣きましたが、相手は呆れて私を夜陰の戸外に放置して、どうせそのうちに折れて戻るだろうと高をくくっていたのです。そのうちに私に説得を試みましたが、私は自分でも呆れるほどに強情を張り続けて、何昼夜もそのまま戸外に居続けて、食事も取らずに頑

張っていました。夏でしたが、それでも夜は寒く、雨でも降ればそれこそ震えるようでした。狼が近寄ってきたこともありましたが我慢していました。しかし、遂に抵抗する体力も限界となり、失神してしまいました。気が付いたときには、私は室内に入れられて寢床に伏していました。全身に苦痛が伴って、もだえ苦しんでいました。家人が漢方医を連れてきて治療を施しましたが、私の額には内出血の赤痣が全面にできていて、顔全体が真っ赤になって、なかなか消えませんでした。

私は、日本人でなくなったと悲嘆にくれていましたが、それでも頑として要求には応じなかったので、空き家になつていた小屋に移されて軟禁されてしまいました。しかし、花嫁となるべき者を死なせるわけにはいかなないので、食事だけは与えられていましたので、死ぬことはなかったのです。そのうちに私も、少し強情を張り続け過ぎたと反省して、今までの行為を謝って、生きていくために働くことにしました。

この方正県は水田も多く、中国の農家としては水稲

を作るところが多かったし、朝鮮人農家も比較的によくいました。真夏でも冷たい水田に、素足で入って草取り仕事をしました。

種まきも、ただ種をばらまくという原始的な農法でしたので、生えてきた苗は密生していて稲と稗との見分けが難しく、草取り作業は遅々としてはかどりませんでした。一カ所にいるうちに、大勢の満人の仲間にはぎやかにしゃべりながらどんどん進んで行くので、私は一人取り残されるかっこうでした。しかし、その人たちの仕事を見ると稲と稗との区別もせずに、ただ乱暴にむしり取っているだけで、少しでも早く先に進むというだけの仕事でした。私が一人で作業をしていたら、「お前は子供だから駄目だ。帰れ！」と言われて帰されたこともありました。

ある日、やはり草取り作業をしていたら、ぼつんと一人で作業をしている人がいたので、「もしかして、あなたは日本人ではないですか？」と声を掛けたら、やはりそうだったので、二人は急に親しくなって話し合いました。その後、その人の世話で、遅くなくても

よいから丁寧に草を取ってくれという家に雇われて、久しぶりに気持ちが悪くなるまで、二人で仲良く働きました。

だれがどうなっているのか、収容所で別れた郡山分郷の人や兄嫁たちは、無事に日本に帰ったのか、そして、日本がどうなったのか、何も分からないうちに一年がたってしまいました。

そんなある日、「お前の妹が泣いて困るからきてくれ！」ということで、びっくりして妹の養家に行ったところ、妹は、裸のうえに麻袋だけをかぶせられ、下半身には一糸もまとわず、物置小屋に座っていました。私の顔を見ても泣くこともしませんでした。涙はもう枯れてしまったという様な顔をしていました。

私が、「どうしたの？」と、問いたとしても、妹はもう日本語を忘れていて話せなくなっていました。惨めな再会に、私は妹と抱き合って泣き崩れてしまいました。

事情はこうでした。妹は、養女になった家の男の子と結婚させられることになったが、妹は「嫌だ」と

言って泣き続けた。現地の風習では、子供のときに婚約を決めて養育する「童養媳婦トシヤシエフウ」という風習が一般的であって、その養女先の家でも、妹に対してそうすることにしてはいたのだが、妹は泣いて抵抗をしていたのです。養家では、「それが嫌ならば村にいる残留孤児の日本人の男の子と一緒になれ」と言われたが、それも嫌だと拒絶したところ、ひどく怒り、「着ていた服も返せ」と言って脱がされ、挙げ句のはてに裸のまま姉のところに行けと行って追いつて立てられたそうです。

女の子が裸では外にも出られずに、いじめられていたのです。

こんな虐待を受けるのも日本が戦争に負けてしまったからだと思うと、悔しくて悔しくて、泣くにも泣けませんでした。このままにしていともどうにもならないので、私は勇気を奮って役場に行き事情を話しました。

役場の話で、裁判所にも出頭して調べてもらい、妹はだれとも結婚をする意思がないことを申し立て、衣

服も与えるように願い出ました。その結果、養家から私のところに引き取ることも許されましたし、衣服も与えられました。

それからは、姉妹での生活が始まりましたが、相変わらずいろいろな難儀なことが続いて起こりました。満人の家にもらわれていった他の日本人は、みんな素直に結婚して落ち着いた生活をしているのに、私たち姉妹は頑固に意地を通し続けていたのは、貧乏士族の出である立花家の血を引いていたせいであつたと今も考えています。

でも、現実にはあまり意地を張り続けていると、周囲の人もだんだんと冷たくなってきて、親しく付き合える人もいなくなりました。私自身も欲求不満からのストレスがたまり、心身共に不調を来して頭痛がするし、全身が痛み出して、とうとう苦しくなって医者に診てもらいましたが、どこも悪いところは無いと医者も持て余していました。私も、何も悪いことはしていないのに、どうしてこんな責めを負わなければいけないのかと悩み続けましたが、そうすると余計に頭が痛

くなってきました。

やがて中国は、国民党政府から中共政府に変わり、日本人残留者に対する扱いもだんだんと和らいできて、残留者同士の交流も許されるようになってきました。方正の収容所で別れ別れになっていた兄嫁の消息を知らせてくれる人がいて、涙ながらの再会を果たし、お互いの無事を喜び合いました。それからはお互いに訪ねては励まし合っていました。

残留日本人の帰国が開始されるということも知り、一日も早く帰れることを期待して日本にも手紙を出しました。そして、兄や姉も既に帰国していて、福島で再び開拓の仕事をしていることも知りました。兄たちと連絡がとれるようになり、日本の様子、特に故郷のことが分かるようになると、早く帰りたいという気持ち一段と高まり、一分一秒でも早くこの苦境から脱出したいということで頭の中はいっぱいでした。

帰国するには身元引受人が必要だということで、長兄に帰国をしたいが引き受けてくれるかという内容の手紙を出しましたところ、早速に返事があり、「帰

国するのは自由だが、日本はまだ敗戦国でアメリカの占領下にあつて、いろいろと難しい手続きもあるし、おれたちは開拓が始まったばかりで生活は苦しい。しかし、兄嫁だから、できるだけのことはするから！」ということでした。この返事を読んで、帰りたい気持ちが一気に頂点に達しました。

兄嫁は、手続きが早く終わって一足先に帰国してしまったので、私たち姉妹と一緒に帰国することを条件にして手続きをしましたので、簡単には許可が出ませんでしたが、帰国できるという明るい見通しがついたので、私の体調も、いつの間にか健康体に近く戻っていました。やはり精神的なものが病気をもたらしたのだったと思いました。

六 帰国、そしてその後

ようやく帰国の手続きが終わり、引揚船に乗船したのは、昭和二十八年の初秋で総勢千余人、「興安丸」という船でした。あの郡山分郷開拓団でお世話になった団長夫人やその娘さんたちも一緒でした。

九月十三日にやっと郡山駅にたどり着きましたが、

残留帰国者に対する対応は、他県のそれに比して福島県、特に郡山市は冷たいものでありました。あの郡山分郷をつくるときの送り出しの歓送とは雲泥の違いでした。私たちの前途の困難な道を暗示しているような気がしました。

私が引揚船に乗船するときに、乗船名簿に名前を書いたの間に違つて長兄の名前を書いてしまったらしく、日本の新聞の「帰国者報道欄」には、そのまま長兄の名前が報じられました。叔母がそれを見て、「もう前に帰っているはずの人が、また帰ってくるのか？」と思つたと、後で会つたときに大笑いされたことがあります。兄たちが入植していた開拓地には郵便も配達されない所なので、一番早く私たちが帰つて来ることを知つた叔母が、急いで兄たちに知らせしてくれたそう、出迎えも次兄ただ一人でした。

それでも嬉しく懐かしく、泣きながら抱き合いました。

九年ぶりで見た祖国や故郷の山河は、昔とちつとも変わらずに、美しくそして穏やかでした。夢のよう

で、やっと帰れたのだ、という実感をしみじみと味わいました。

十人の兄弟姉妹のうち、兄二人、姉一人、弟二人の五人はすでに帰国していて、私たち姉妹を加えて七人が生きて帰つたことになりました。何から話をしたらよいのか、あれから話そう、これも語ろうと胸にあふれる山ほどの話があり、涙と共に語るつもりでしたが、何だか胸につかえて急には話すことができませんでした。世の中も変わり、お互いの年令も変わり、そして、それぞれの生活もあつたので、何となくちぐはぐな、複雑な気持ちになっていました。その上に、妹は日本語が分からずに黙つたまま、兄弟たちの顔を見ているだけでした。

長兄の家は狭いところでしたが、数日後、そこを手直して住むこととなり、やっと日本の地で、日本の家に寝起きすることができました。

妹は日本語が話せないもので、長野県の白井さんのところに日本語の勉強に行きました。引揚船で一緒に帰国した日本語の話せない子供たちを集めて、白井さん

が教えるということになっていたからです。三カ月後には立派な標準語が話せるようになって戻ってきました。

昭和二十八年は、東北地方、特に福島周辺は大冷害で凶作となり、開墾したばかりの開拓地の収穫が皆無で、みんな大変な苦勞をしていましたが、私は帰国したばかりなので、何の手助けもできずに冬越しをしました。体がどこも悪くなく、身も心も軽くなりました。日本は有り難い所だと感謝したものです。

昭和二十九年四月に、長兄と親しい開拓者仲間の三瓶孝雄に見そめられ結婚しました。お互いに二十九歳でしたが、私にとっては人生初めての心躍るときでした。粗末な支那服の花嫁姿で、風呂敷包一つと兄からもらった四千円の持参金だけでした。残留して満人の家に養女として入ったころのことを思い出して、生きて帰国したことをあらためて感謝したものでした。

三瓶家も、両親が健在で兄弟・姉妹も多く、家も狭くて大変でした。その上に、両親は厳しい人で生活も楽ではありませんでした。

嫁ぐときに長兄は私に、「体の小さいお前なんか、あの家の嫁が務まるか？ っらかったらいつでも戻っていいよ」と、同情の言葉を掛けてくれましたが、どんなにきつくても、あの残留時代からすれば天国だと思っただけで頑張っていました。

共に苦勞してきた妹は、残留時代も学習はしていましたが、日本の学校には行っておらず学歴が全然なかったもので、これからはこれから生きていけないというので、長兄が村にある小学校の一年生から始めたらと言っただけで進めましたが、妹は十八歳になっていたので、この年ではとてもではないが恥ずかしくて嫌だと言いました。しかし、それでは将来困るので、教育委員会の方と相談した結果、中学一年生に編入の許可があり、やっと学校に行くようになりました。それでも教室の中の大きさが目立って恥ずかしそうにしましたが、そのうちに年下の友達がたくさんできて全校の人気者となりました。休みの日には家の手伝いもよくしていました。

しかし人間には、それぞれの持つて生まれた運命と

いうものがあるのでしょうか。引揚船仲間で山形県出身の、当時、青森県の八甲田山の奥深い高原の開拓共同農場で働いていた男性と恋愛関係になり、駆け落ち同然で行ってしまいました。

その後はいろいろと家庭的なもつれもあって、離婚したり再婚したりの数奇な運命をたどり、晩年にはとうとう自ら命を絶ってしまいました。

それもこれもみんな、昭和二十年八月十五日を境として天から与えられた、見えない糸で引かれた運命の為せる業であるのでしょうか。

戦争というのは、人の運命を狂わせてしまうのです。私は、兄弟姉妹の十人の中で一番小さく弱々しい子であったのに、今日までいろいろな苦難に遭遇したのに、よくもまあ無事に過ごしてきたものと感無量なものがあります。

父も母も、兄も姉も、弟も妹も、みんな良い人だったと、今でも誇りに思っています。

今は、長兄と長姉と私の三人が存命しております。この三人が生きている限り、みんなの供養をしていき

ます。

開拓一家の生涯

福島県 矢部 勘治

矢部 京

渡満するまで

福島県岩瀬郡白方村の山間部にあつて、炭焼きと小作農を生業としていた矢部家の三男として、私は生まれた。八人兄弟の五番目という大家族で、貧乏生活の日々であつた。

一番上の兄は海軍を志願して早くから家を出ていたし、姉は東京に嫁ぎ、二番目の兄が両親と一緒に家の仕事をしていた。私も、小学校を終えるとすぐに、地主の家に雇われて住み込んで働いていた。

昭和十三（一九三八）年に、姉の夫である加藤芳雄が、煙草専売局須賀川工場から派遣されて、北支那の大同という所に、新しくできた煙草工場の経営にかか